

日台の伝統色が見事に調和した 青森県大間町の天妃(媽祖)祭

本会理事

永山 英樹



媽祖を祀る大間福荷神社

本州最北端の港町、青森県下北郡大間町で七月二十日、天妃祭という町を挙げての祭典が行われた。「天妃」とは航海や漁業の守り神として知られる媽祖の別名だ。媽祖信仰の発祥地は中国の東南沿海部だが、台湾の代表的な民間信仰にもなっていることはよく知られている。その媽祖が、なぜこの地で祀られているのだろうか。

これについては江戸時代前期、九州の野間半島で祀られていたものを勧請したという説が有力だが、延宝五年(一六七七年)、長崎へ渡来した中国の高僧が持ってきた媽祖像を徳川光圀が水戸で祀り、それを勧請したという話も広く信じられている。いずれにせよ、大間に媽祖像を祀る天妃祠が創

建されたのは、今から三百余年前の元禄九年(一六九六年)のこと。それ以来、地元民だけでなく、多くの船舶の参拝も集めていた。明治六年に稲荷神社に合祀されて今日に至っているが、祠の扉が久しく閉じられていたため、住民は近年までそれが何の神であるかわからなくなっていたという。

勧請三百周年にあたる平成八年になり、同町観光協会会長だった大見光男氏(現県会議員)の発議で、天妃祭での町興しが始まった。この年、稲荷神社は台湾での媽祖信仰のメッカといふべき北港の朝天宮と姉妹宮となり、それ以降、毎年七月二十日には、この祭りが盛大に執り行われるようになったのだ。大見氏らに当初から大きく協力し

町長、町議会議長以下、町の有力者や日本媽祖会のメンバーが打ち揃って参列し、神事が厳粛に斎行された。

その後、色とりどりの大漁旗を掲げた十隻ほどの漁船団が港内を三周したのち、漁師たちが網上げの歌を朗々と



純日本式で行われた本祭



台湾色あふれる媽祖行列



千里眼と順風耳に子供たちは大喜び



大漁祈願を行う漁船



着ぐるみを着るのは台湾の子供たち



地元の中学生も竜踊りを奉納

ているのが、日本の媽祖信仰の団体である日本媽祖会(東京)の入江修正会長(現名誉会長・本会理事)、呉正男常務理事(本会理事)、そして現会長の顔錦川氏らに在日台湾人だ。いうなれば日台交流による町興しである。

今年の祭は十九日の宵宮に続き、二十日午前、稲荷神社で本祭が執り行われた。神社入り口には「天妃媽祖大権現」と書かれた大きな幟が立てられるなど、これが町にとつていかに重要な祭になっているかがわかる。本殿では



媽祖像(本尊の分身)

歌う中、神符を海中に沈めるといふ、大漁祈願の大掛かりな神事が取り行われた。天妃祭が始まって以来、漁獲量は確実に高まっているという。

ついで朝天宮から贈られた本尊分身を捧持し、同じく祭具を用いた台湾式の媽祖行列が神社を出発し、町内を練り歩いた。音楽が奏でられ、竜踊りに獅子舞、そして爆竹が鳴らされるなどの華やかな大行列がのどかな港町を進む様は、得もいえぬ面白さがある。来日した台湾の子供たち数十人も参加し、両国交流の深さを感じさせた。

すでに町民たちの間で媽祖信仰はすっかり定着している。この日の盛り上がりはそれを物語って余りあった。

日本では長崎などの媽祖祭は有名だが、日台それぞれの伝統色がこれほど見事に調和した祭典は他にない。顔錦川会長は「来年は遷座三百周年で、天妃祭十周年。大勢の参加を呼びかけたい」と語っている。

(写真提供・黄麗珍氏)